Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

保育における人形劇の導入と展開についての史的検討
2. 内山憲尚による人形劇団の創設と普及活動

斉藤尚子
（東京家政大学）

はじめに

保育に人形劇を導入したのは、東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事だった倉橋惣三であり、それは関東大震災以前のことで、彼の生いたちや欧米で見てきた人形劇に大きく影響されてのことだった。「お茶の木人形座」と称して園児たちに演じて見せ、それを支えた保姆たちの活躍によって人形劇もしだいに広がったのであるが、ちょうどそれは新興人形劇と呼ばれる劇団が次々と誕生したのと時を同じくしていた。

以上が前回報告の概略であるが、今回は大正13年より増上寺託児所の主事として保育に関わり、人形劇の普及に活躍をした内山憲尚（1899－1979）について検討を行なった。

1. 人形劇との関わり

内山憲尚は、小学校1年から3年まで伊予・吉田町の祖父母の許に預けられるが、その祖父が浄瑠璃が大好きであった。農閑期になると淡路から一座がやってきて小屋掛けをしたので、祖父にたびたび連れて行かれるうちに興味を持つようになったという。祖父が大阪に来てからも御霊神社にあった文楽座に連れていかれ、語りや人形の動きに感動しながら見ていたのであった。

中学卒業後就職するが事務の仕事に満足できず、やがて浄土宗の四恩学園というところで不就学児童の教育を手伝っているうちに専門知識の必要性を感じて上京、大学に入学した。また、上京と同時に増上寺日曜学校を毎日曜に手伝っていた。

大正12年に関東大震災に会い、一度大阪にもどるが12月に上京。増上寺でお罹災者の救済に当り、子どもたちのために翌13年3月増上寺託児所が借り教室で開かれ、彼はそこの主事となった。同じ頃、平塚託児所の主事も頼まれて週に1日は平塚へ出かけている。

翌14年芝公園の焼跡に独立園舎が建てられ、増上寺託児所は、4月から明徳幼稚園となり、彼はそこに住み込んだ。園児たちに人形劇を見せるようになったのは、この頃からだった。

「大正十三年若者が増上寺の幼稚園をお預りしていた頃、毎土曜日は小さい舞台を持ち出して紙芝居をやったり玩具を並べてお話をしたりしていたが、支那のギニョールの一個を手に入れた時に、今後の幼児のための新芸術はこれでなければならないと痛感した。その後、街頭に玩具屋の店頭にギニョールを尋ねて、買い得た数個のものを組み合せて脚本を作ったのである」[1]と記している。

倉橋が附属幼稚園の保姆たちと共に演じたのに対して、内山の場合は書かれた脚本から推察すると、ほとんど一人で演じていたと考えられる。なぜ人形劇を保育に導入したかについての明確な記録は探せないでいるが、文献から言えることは、幼児の芸術教育としてということと、彼自身が人形劇が好きであったことが理由として上げられる。

2. 「子供の人形座」と「東京人形劇研究所」

明徳幼稚園を辞めた後、岸辺福雄校長の東洋家政学校で教えるようになるが、週に一度は東洋幼稚園児に童話を話していた。そのうちに新興人形劇団が次々と誕生し、保育においても倉橋が人形劇普及に力を入れるようになった。そして内山は「東京人形劇研究所」を組織し、童話協会の仲間などと「子供の人形座」を結成したのである。

子供の人形座の第1回公演は、昭和7年1月24日(日)小石川の伝通会館で行なわれ、プログラムは1.鼠経 2.おもちゃ芝居 3.童話 4.舌切雀 5.孫悟空で、ギニョールが中心に演じられた。その後春と秋の年2回公演が続けられたが、主にギニョールが使われ、マリオネットや影絵も演じられた。子供の人形座の公演は昭和15年まで続いたが、仲間が次々と招集されて戦死したり病死したりで、第15回を持って解散となった。

東京人形劇研究所は、子供の人形座の前年に設立され、所長に内山憲尚がなった。設立旨意は「子どものための人形劇の研究及啓蒙宣伝、指導。子供の人形座と提携して、その実際運動を援助、促進することを目的とす」[2]となっていた。そして幼稚園託児所の保姆や小学校日曜学校の教員を対象に講習会を開催したり、人形劇の学校を企画して指導を行なった。講師は内山の他、島野奎三、藤原護郎、山北清次、青柳義智代（前宝仙学園短大及附属幼稚園長）など子供の人形座のメンバーである。偶然手に入れたチラシによれば、東京人形劇研究所の事務所は神田の中央仏教会館にあり、彼の著書によると、研究所は自宅のあった北区岩渕町で、品川に移ってからは聖美幼稚園内となっている。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

人形は、彼自身が開発したという「紙粘土」で頭が作られ、衣装は夫人の内山すずが縫っていた。「一時は人形芝居にとり憑かれ、人形芝居狂人となり毎晩おそくまで人形の製作に凝り夜を徹することもあった」[3]と述べている。

内山憲尚年譜（昭和19年まで）	
1899（明32）	1/3大阪に生まれる　幼名一三（いさぞ） 小1～小3まで吉田町（愛媛県）の祖父母に預けられる　教会の日曜学校に通う
1907（明40）	小5　教会にて巌谷小波、久留島武彦のお伽話を聞く
1918（大7）	川柳を作りはじめ、号を憲堂とする
1919（大8）	中学卒業後、東洋紡績本社へ入社
1921（大10）	釜ヶ崎の浄土宗四恩学園の奉仕に入る 浄土宗大阪お伽団にて口演童話の修業 子どもたちに毎晩のように童話を話す
1922（大11）	児童心理学を学ぶため上京、東洋大学入学　日本童話協会の会員になり芦谷重常に師事　巌谷、久留島、宮田福雄らの口演会に出席　増上寺日曜学校を手伝う
1923（大12）	関東大震災に会う
1924（大13）	増上寺託児所が開設され主事となる この頃から子どもたちに人形劇を見せる
1925（大14）	東洋大学社会事業科卒業 託児所改め、明徳幼稚園主事となる
1926（大15）	結婚　口演童話を頼まれて地方に出ることが多くなる
1927（昭2）	明徳幼稚園を辞職 「絵噺と人形芝居」（法蔵館）を出版 中学教員免許を取得するため東洋大学二部に入学（昭6卒業）
1928（昭3）	東洋家政女学校勤務（昭8、3月まで）
1930（昭5）	東京人形劇研究所創立
1931（昭6）	日本大学に入学　舞台芸術人形劇を専攻 「子供の人形座」結成
1932（昭7）	「子供のための人形劇脚本」（文化書房）を出版 9月から翌年3月までハワイ・アメリカ・カナダの人形劇を見てまわる
1933（昭8）	「指遣人形劇の製作と演出」（日本童話協会）を出版
1934（昭9）	聖美幼稚園　園長となる
1935（昭10）	台湾へ人形劇の研究に出かける（1カ月間）
1936（昭11）	中国へ人形劇の研究に出かける（1カ月間）
1938（昭13）	5/26～6/20　山内勇仙、加藤武夫と共に中国へ兵士の慰問　人形劇を演ずる
1939（昭14）	大政翼賛会「人形劇研究会」の委員となる
1940（昭15）	「子供の人形座」解散 得度し、名を憲堂から憲尚に改める
1944（昭19）	東京高等保育学校の学監となり、保育者養成にあたる 幼稚園閉鎖命令が出るが、聖美幼稚園は「西品川戦時託児所」に切り替え、保育を続けた。

3. 出版活動

彼は生涯において100冊あまりの本を出版しているが、人形劇に関する本も6冊ほど著している。

写真は聖美幼稚園に残されていた内山憲尚自作のギニョール

昭和2年法蔵館より出版した「絵噺と人形芝居」は、お茶の水幼稚園の菊池・徳久保姉が書いた「幼児のための人形芝居脚本」（昭5、フレーベル館）よりも早く出されたのであり、子どものための人形劇の本としては最初のものである。また「指遣人形劇の製作と演出」は、日本大学時代の卒論の副産物と述べているが、日大芸術賞を受け、最近「児童文化叢書」の1冊として復刻された。

さらに雑誌「童話研究」は、昭和7年の1号と5号に人形劇特集号を組んで、彼の脚本や「ギニョールの作り方」を掲載したのである。

まとめ

1、倉橋惣三よりはやや遅れたものの、内山憲尚も保育における人形劇の先駆者と言える。倉橋同様彼も子どもの頃から人形劇に親しんでいた。

2、子供の人形座による公演、東京人形劇研究所企画の講習会、脚本や人形製作の出版など、人形劇の普及に幅広い活躍をした。

3、内山自身がギニョール製作に非常に熱心であった。

4、次は、戦前から戦後にかけての人形劇の状況と、山内勇仙及び松葉東庸氏について検討の予定である。

註：1）内山憲堂「指遣人形劇の製作と演出」日本童話協会出版部 1933

2）、3）内山憲尚「幼児と共に五十年」同出版 1975

その他の主な参考文献：復刻版「童話研究」久山社 1988

内山憲尚編「日本口演童話史」博文社 1972

内山憲堂「子供のための人形劇脚本」文化書房 1932

NII-Electronic Library Service